
THE漢

蒼穹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE漢

【Nコード】

N6737A

【作者名】

蒼穹

【あらすじ】

嶋崎尚紀のもとにやってきた「君を漢にしてやるよ」という怪しい男と共に過ごす非常識な日常生活

厄日

その日は嶋崎尚紀にとって生涯、いや今世紀最悪の厄日だった（本人談）

朝、ダンスから落ちてきた自信作のプラモが顔面に直撃し、痛快な目覚めを体験することができた。

今思えば稀有な体験だったのかもしれない。

学校への通学路をいつもの様に歩いていると建設中のビルから鉄骨が落ちてきた。

まあ当たらなかったけど。直後に鳥の糞が頭に命中したが（苦笑）

そんなトラブルにも屈せず学校へ到着。下駄箱を見ると。

・・・わらん人形入ってた。

とりあえず見なかったことにして隣の奴（話した事もない奴です）の下駄箱へ入れといた。

寄付ってすばらしいね！

教室へ入ると俺の机の上にマグロが置いてあった。

ビチビチと元気に俺の机の上で生と死のはざまを彷徨っていやがった。

俺にどないせーちゅうねん。

とりあえず余ったプリントを置く場所に置いておく。

改めて机に座ると机の中に何かが入っていた。

ようかんだった。

しかも結構新しい。

これは親切な誰かのプレゼントなのか新手的嫌がらせなのか判断が難しい。

クラスの中に満ちる笑い声が自分を笑っているような気がした。

畜生、なんか悔しい。

なぜか敗北した気がした俺は大きな声でカエルの歌を歌っていた。

授業中、まじめに勉強していた俺に窓ガラスを割って全身タイツの男が俺の頭に蹴りを入れてきた。

しかも歯を輝かせ。

「君はもっと強くなる、誰もが認めるほどにな。」

と俺に言って去っていった。

今思えばよくわからない出来事だった。

いや、今思わなくても十分ワケワカン出来事だった。

しかもなぜか先生感動の涙流してたし。

世界は変わってしまったらしい、よくわからん方向へ。

まあほかにも色々あったけどめんどいので省略。

授業も終わり部活も入っていない俺はさっさと帰ろうとしたとき。

下駄箱にわら人形入ってた。

しかも釘が刺さって赤い絵の具でバージョンアップされていた。

とりあえず隣のクラスの下駄箱に勘で入れといた。

君は勝ち組ですと書いたメモ用紙同梱で。

帰り道、また鉄骨が降ってきた。

しかも同じビル。

ここの管理体制が不安です。

家が見えたところには既に疲れ果てていた。

隊長！HPがあと1しか残っておりません！

耐えるのだ！あと少しでこの戦いが終わる！！それまで生き延びるのだ！！

と自分に言い聞かせ一歩ずつ確実に歩いていく。

よし、自分の部屋にこもってさっさと寝てしまおう。
そう思い玄関のドアを開く。

彼は知らなかった。

この日最大の厄災が自分の部屋で待っているということをして・・・。

彼が自分の部屋のドアを開けた。

信じられない光景が目に見え込んできた。

授業中、蹴りを入れていたタイツ男が堂々と俺の秘蔵のエロ本読んでいた。

そいつは俺の姿に気付いて本を読むのをやめた。

つか勝手に読むな

そしてタイツ男は俺に笑顔をみせこう言った。

「やあ、君を立派な漢おとしにしてあげよう。」

またもやそいつの歯が輝いた。

新たな人生の出発点（苦笑）（前書き）

ノリと勢いだけで書いております。読んでくれれば幸いです。

新たな人生の出発点（苦笑）

尚紀は有無を言わずタイツ男を蹴りつけた。

タイツ男は見事にぶっ飛び、床に顔面から突っ込んだ。

「な、何をする少年！」

タイツ男は勢いよく顔を上げる。

その顔めがけ二発目の蹴りを顔面に入れる。

タイツ男は再びぶっ飛んだ。

鼻血が綺麗な弧を描いた。

「何するのよ！」

「黙れ・・・」

いきなりオカマ口調になったタイツ男に三発目の蹴りを放つ。

今度は別の鼻の穴から鮮血が舞った。

それでもタイツ男は起き上がる

「見てみて、ダブル鼻血、面白いよね？」

尚紀はバットを取り出し構えた。

それを見てタイツ男の顔が青ざめる。

「さああと5秒待ってやる。その間出て行かなかったら貴様をデリーイイイトしてやるからな。」

「ちよっと待て！おちついて——」

「5秒たちましたあああ！！」

「早っ！」

「最後に言いたいことは？」

「落ち着いて話を——」

「無いんならさっそく貴様の人生の終着駅へご招待だああああ！！」
尚紀が殺る気満々にバットを振り下ろす。

タイツ男は無我夢中で回避行動をとる。何とかかわしたタイツ男の顔は汗でビッシヨリ濡れていた。

「待て、ここは落ち着いて話をしよう！」

「クロス、クロス、コロオオオオスッ!!」

「ひゃーダメだ! バーサーカー入っちゃってるよ! 攻撃力二倍じゃく!」

ゆっくりと殺気にまみれた尚紀がタイツ男に向き直る。

その時、タイツ男の視界にある箱が入った。

タイツ男は急いでその箱を取り、尚紀に突きつける

「待て! 止まれ、この箱が目に入らぬか!」

「ぐっそれは・・・!」

尚紀が怯むのもそのはずだ、この箱の中にはエロ本やら何やら母親に見られたら非常に不味いものが溢れていた。

「この箱の存在が一般大衆に公開されなくなったらその凶器から手を離して、落ち着いて話をするんだ!」

「くそっ。」

尚紀が渋々とバットを床に放り投げた。

「で、お前は何なんだ?」

尚紀は床に正座しているタイツ男に言い放った。

タイツ男はふふふと含み笑いをする。

「私の名前は原 祐二。見ての通り、立派な漢だ。」

「男?」

尚紀が聞き返すとタイツ男もとい祐二は目を光らせ立ち上がった。

「ちいがあああああう! 男ではなく漢だ! 男とは違うのだよ男とは!」

「やっぱ出てけお前。」

一通り叫んだ祐二は再び床に正座した。

「それで君のもとへやってきた理由だが」

「おおそれを聞いたかった。それで何のようだ? しょうもない理由だったら叩き殺すからな。」

再び尚紀がバットを取り出す、しかし今度は金属製だった。

しかし祐二はそれを見ても臆せずむしろ笑っていた。

「ふふふ、聞いて驚け、君を世界もが認める漢にしにきた。」

「断る。」

尚紀は即答した。

「何故だ！何故断る！！漢はいいぞ、なんていうか世界のロマンと汗臭さを詰め込んだ種の無いスイカのようなものだぞ！」

「例えがよくわかりません。と言うか汗臭さなんていらんわ。」

「大丈夫だ、君には素質がある！今日学校であったときから君からは漢の匂いがぶんぶんした！」

今日は体を念入りに洗っておく必要があるようだ。

「とうかあんた明らかに不法侵入だし、さっさと視界から消えてほしいから警察呼ぶけど、OK？」

しかし祐二は焦るところか余裕の微笑みを浮かべていた。

「何を言っている？私は君の母親から許可を得てこの家に入っているのだよ？」

「母さんが！？どうして？」

「息子さんを立派な漢にするために家庭教師を無料でやらせてくださいと言ったら即OKがでたぞ。」

そういえばうちの母さんはタダとか無料とかそういう類の言葉に弱かったなあと思ふ。

「しかも、君の部屋で寝泊りする契約も成立してしまっている。」

あの来るもの拒まずの母さんめ、どうやらこの前指名手配犯を二泊三日泊めて警察に注意されたことは懲りてないらしい。

「じゃあそういうわけで今後ともよろしく頼むぞ未来の漢よ。HA
HAHAHA。」

祐二が部屋から出て行く。

と思つたら尚紀のほうへ振り向いた。

「ああ、部屋は隣の部屋を借りることになったから。」
と言って今度こそ部屋から出て行った。

部屋で一人残された尚紀は啞然としていた。

明日から自分は漢教育を受けることになる・・・。

「ってなんじゃそりゃ!？」

このあまりにも非常識で理不尽な現実への怒りは誰に向ければいいのでしょうか神よ。

どっと疲れが出てきた。

というか疲れが出ないことのほうが異常だ。

尚紀は床に力なく倒れた。

今日は厄日だった。生涯、いや今世紀最大の厄日だ。

爽やかな朝

朝、尚紀は床の上で背伸びをした。

結局昨日は疲れて晩飯をさっさと食べ布団をひかずに床で寝てしまった。

「朝飯食わなきゃ・・・。」

のそのそと起き上がり、食卓へ向かう。

食卓には一番見たくない奴がいた。

「やおおはよう未来の有能なる漢よ。」

軽く無視をする。

その時、台所から母親が出てきた。

「こちら、今日からお世話になる先生ですよ。そないな態度とつたらあきまへんよ。」

このセリフを聞いてわかると思うが、母は京都生まれである。

ちなみに普段着はいつも和服。

母が尚紀に朝食を渡す。

「母さん、何でこんな奴家に入れたんだよ。」

「あら、無料で教育を受け持ってくだはるなんて、今時なかなかおらへん奇特な方やで？」

母さんも今時なかなか居ない奇抜な方だと思えますが。

「それに自分の息子が世界も認める漢なんて、なかなか素敵なことと思わへん？」

母は変な思考の持ち主だ。

「ところでさあ、こいつの泊まる部屋、何で父さんの部屋なんだよ。」

この母への説得は無理と判断した尚紀は話題を変えた。

「ちようどあの人出張でおらへんかったし、それに誰も居ない部屋なんてあっても寂しいだけやろ？」

「無許可かよ!？」

ワケワカラン、何もかもワケワカラン。

「まあまあそう朝からカリカリするな、未来の漢よ。」

「黙れ、話すな。」

「落ち着けて俺の爽やかな笑顔を見て気を和ませるが良い。」

祐二が歯を輝かせて笑う。

「ねえ頼むから息しないで？ テメーと一緒に空気なんか吸いたくない。」

尚紀が悪態をつくが祐二のほうは気にせず尚紀に詰め寄ってくる。

「そう言わずにさ、俺と汗飛び散る朝の漢体操しにいけないか？」

「お願いだから死んでくれる？ 葬式あげてやるからさあ。」

「またまたそんな冷たいことをお、本当は尊敬とかしてんだろ？ 何処をどう考えたらそんな答えに行き着くのやら。」

「正直なところ私のことどう思っているのかね？ ん？」

「これほど殺意を覚えた人間は居ないと思っているよ。」

そう言って祐二の顎にアッパーをぶち込む。

綺麗に吹っ飛ぶ祐二。

「これぞ、漢の散りゆく姿・・・。」

そう言って祐二はノックアウトした。

その光景を見て母は、

「朝から元気やなあ。それこそ漢や。」

と言って微笑んでた。

この母の事についてはもはや突っ込むまい。

「さて、母さんも仕事にいったし、今日は土曜日で休みだし、ネットの海へ飛び込むか！」

仕事にむかう母を玄関まで見送り尚紀はネットをするためパソコンのある自分の部屋に急ぐ。

ちなみに母の仕事は呉服屋に勤めている。

部屋に入ると祐二が部屋を中心点で仁王立ちしていた。

きも・・・

尚紀の感想はそれだけだった。

「何で俺の部屋に居るんだよ。」

不機嫌な顔を隠そうとせず尚紀は言い放つ。

「今日は学校休みだろ？ 今から君を漢にするために授業をしてやろうと思っただけ。」

「ボイコットさせていただきます。」

即答する。

大体漢にするための授業って何だよ。

俺に何させる気だ？

「その質問に答えてやろう！！」

「心を読まれた！？」

祐二がフッフッと含み笑いをする。

「当たり前だ！ 一人前の漢なら相手の心を読むことが可能だ！」

「なんかすげー！ その能力だけ教えろ！」

「それが人に物を頼む態度か？ 少年よ。」

「教えやがれ。」

「いや、それが――。」

「教えがってください。」

祐二ごときに純度100パーセントの敬語を使う気がない尚紀であった。

「いや、ちゃんと一から授業受ければそのうち教えてあげるから。」

「あーじゃあいいや、めんどくさいし。」

そう言い、尚紀はパソコンの前に座る。

そしてパソコンの電源を入れた。

「何すんの？」

祐二が聞いてくる。

「インターネット。」

「インターネット・・・ああ、国際網。」

「無理して日本語に戻すな。」

こいつもしやアナログ人間か？

「インターネットってどんなものか知ってる？」

「巨大な網でホームページというものを捕まえる事。」

アナログ人間決定。

「たまに女性の裸が見れるよな。」

「何エロサイト見てんだー！ー！！」

「もう夢中に見たよ。」

「それは漢というよりオスの行動だ。」

「でもその後100万請求された。」

白い歯を輝かせ祐二が笑う。

バカ人間でもあるようだ。

「で、お前はいつまでここに居座る気だ。」

先ほどからじーつと後ろで正座している祐二に痺れを切らし一言文句を言う。

「イエイ」

「イエイじゃねえええええー！！質問に答えやがれ！！」
ついに怒鳴り散らす。

「だから言ったじゃないか、漢授業を講義しにきた。」

「誰が受けるか。」

「そういわずに受けてくれよ。な？」

「何で俺がそんなアンノーンな授業を受けなければならない！」

そう言うのと祐二は真剣な顔をし、

「そうだな、まずそのことから話すべきだったな。」

「なんだ、ちゃんとした理由があるのかよ。」

尚紀はパソコンのディスプレイから目を離し、祐二と向き合う。

「やっとなの事を見てくれたね！僕は嬉しいよ。」

「いいからさっさと理由を教えやがれ。」

いちいちこいつのおふぎけに付き合っていられない。

「長くなるんで、次回ということで。」

「まあ、そろそろ読者も俺たちのぐだぐだトークに飽きた頃だろうしな。」

「次回もTHE漢をよろしく！」

「宣伝すな!!」

爽やかな朝（後書き）

本当にグダグダです。はい。

もう少し読みやすいように書いていきたいと思っています。

漢の理由

祐二が真面目な顔をする。

「俺が君を何故漢にするかだが・・・これを聞くと君はもう日常には戻れなくなる。それでもいいか？」

いつもおちゃらけていた時とは全く感じの違う真剣な口調。

どれほど俺を漢にすることに深い理由があるのだろう。
知りたい……。だが日常に戻れないという恐怖心もある。

「……構わない、教えてくれ。」

結局、好奇心により聞いてしまう。

「わかった、なら教えてあげよう。」

祐二の目つきが鋭くなる。

それと同時に部屋の空気が重くなる。

「君を漢にする理由とは……以下略。」

「ハシヨんな!!」

尚紀が叫ぶと同時に部屋の空気がギャグモードに戻る。

「えー、だってこれギャグ作品だよ？ 難しい説明なんていらないじゃない。」

「せめてストーリーが進む程度に説明しやがれ。」

すると祐二がまた真面目な顔になる。

「じゃあ簡略化して話すけど、これを聞くと……。」

「なんだ？　また日常に戻れなくなるってか？」

「いや、漢塾に通えなくなる。」

「行かなくていい！ つーか行きたくねえええええ！」

「いや、かなり重要な所だよ！？漢塾！」

漢塾・・・名前からしてかなり汗臭そうな場所だ。

どんな授業しているのかすら想像つかない。

てかしたくない。

「いいぞ、漢塾は！みんな汗が35度の角度で飛ぶんだ。」
何がいいのかわからない。

「そして俺は成績一位で塾を卒業した！」

「へえーすごいねー。（棒読み）」

塾に卒業なんてあるのかどうか疑問だが。

「し・か・も、伝説の剣が手に入るんだお。」

「なんかのRPGか！？」

というか語尾がキモイ。

「おいしい！！」

「おいしいんかい！！」

結局グダグダだった。

「で、話さなくていいの？君を漢にする理由。」

「いいよ、聞く気失せた。また今度聞くことにする。」

ていうかもう聞く気など無い。

「でも聞いたら漢塾に——」

「行かなくていい。」

尚紀は先ほどまで会話のため放置されていたパソコンの電源を切り立ち上がる。

「どこか行くのか？」

「気晴らしにその辺散歩してくる。」

そう言うと、祐二も立ち上り、

「よし、今日の授業は課外授業だ！」

「待て待て待て！！」

祐二に思い切り足払いをかける。

見事に転ぶ祐二。

「せめて全身タイツはやめろ。俺の服を貸すから少しはまともな格好をしろ。」

尚紀は最初、祐二をとめようと思った。理由はもちろん一緒に外に出たくないためだ。

しかし祐二はそれでもついて来ると悟った尚紀は、せめて一緒に歩いていても（外見のみでも）まともに見せるために服を貸すことにした。

ちなみに祐二は尚紀よりも身長が高いが、尚紀は大きめの服を買い、それをだらけて着るのが好きなため。祐二にも着れるサイズのものばかりだった。

「そうか、なら好意に甘えて、服を借りよう。」

祐二は割とあっさりと尚紀の提案を承諾した。

どうやら全身タイツ姿に固執しているわけではないようだ。

「ちなみに外に出ても課外授業なんて受けないぞ。」

「なぜ!!」

本気で驚く祐二、どうやら尚紀が必ず課外授業なら受けると思っていたようだ。

受けない理由は、漢なんてならなくていい。授業なんてかったるい。

その前に何をさせられるかわからない授業なんて受ける奴なんていないと思う。などなど。

「めんどくさい。」

とりあえず理由をこの一言にまとめといた。

「安心しろ！漢になるための授業はどれも体育的なもので、楽しいくやっついていけるぞ！」

「体育は好きだが、お前の授業（というか漢になるための授業）を受けるのがめんどくさい。」

祐二が部屋の隅をとぼとぼ歩き、座り込む。

どうやら結構シヨックだったみたいだ。

そんな祐二に尚紀は自分の服を投げ。

「ほら、さっさと着替えろ。」

と言う。

すると祐二が急に元気になり。

「おうそうだな！はやく外に出ようぜい！！」
とハイテンションになる。

こいつの性格がよくわからない。

「さあ、課外授業へ参ろう！！」

「いい加減授業は諦めろ！！」

尚紀は大声で怒鳴り散らした。

漢の理由（後書き）

読んでくれている読者の皆様。

そして評価をくれた方に感謝！

不定期ながらもがんばって書いていきたいと思えますのでよろしく
お願いします。

外出（前書き）

今回から仕切り線を書くことにしました。
少しは読みやすくなっているといいんですが・・・。

外出

10月の風は少し冷たかった。

尚紀は特に行くあてなど無くとぼとぼと歩く。

その横にはいつもの全身タイツとは違う尚紀の服を着た祐二が歩いている。

尚紀の服を着た祐二はかなりまともな青年に見えた。

というか尚紀の服を完全に、そりやもう見事に着こなしていた。

普段ふざけた言動、ふざけた格好をしているせいでなかなか気づかなかったが、

祐二はルックスがいい。

と言うかかなりカッコイイ。

女子高生風にいうとイケメン。

なんか悔しい。

しかも俺がこいつの着ている服を着たときは、

無理しておしゃれしてるガキンチョにしか見えなかったのに

こいつは見事に自分の一部にしてやがる。

いつもの自称爽やか笑顔が本当に爽やか笑顔に見える。

あゝ悔しい、悔しい、悔しい。

こうなったらグレテヤル。

「そう落ち込むな、未来の漢よ。人には得意不得意があるように、人には似合うものと似合わないものがある。」

「うるさい！人の心を読むなあ！その爽やか笑顔で俺を慰めるなああ！

俺を哀れむなあ！慈愛に満ちた瞳で見つめるなあああ！！」

只今尚紀傷心中につき、言動が不安定であります。

「長谷川の爺さん何考えてんだああああ!!」

「残念だ爺さん、君の志は立派だが漢は10歳〜95歳までと決まっているんだ。」

「漢って年齢制限あるんかよ!!」

てか爺さん95歳以上なのかよ。

――――

「さて、尚紀よ。そろそろ課外授業といこうか。」

祐二が爽やか笑顔で言う。

というかまだやる気だったのかよ。

「やりません。さっさとあきらめやがれ祐二畜生が。」

「漢と言えば救出劇が必須。というか憧れた。」

無視ですか!?! そうですか!?!

「しかしいきなり人間の救出劇はきついし危険度が高いので……。」

「

祐二がすぐ横にある川を勢いよく指をさす。

「犬を溺れさせましたああ!!」

犬が川に流されている。

哀れなほど足掻きながら。

「何してんだおまああああああ!!」

「罪の無い犬を溺れさせるなんて心が痛むがこれもすべてお前の漢未来のため。」

「何で俺そんなに期待されてんの!?!」

「さあ行くんだ尚紀!あの犬を救うため!!」

こいつの言いなりになるのはむかついたが犬を見捨てるのは後味が悪い。

「チックショーー!!行ってやらあああああ!!」
俺は服を脱ぎ川にダイブした。

外出（後書き）

最近忙しくて書けるときと書けないときの差が大きいです。凄く不
定期になりそうな予感がします・・・。

課外授業

勢いよく川にダイブした俺は

10月の冷たい川をもともせず、

必死に溺れまいと足掻いている犬に向かって全速力で泳いだ。

ふはははは！^{だけ}体育五段階評価中5の男をなめるなよ！

俺は繊細に、時に大胆に泳ぐ。

そうすべては、あの犬を助けるために！

母さん、今の僕、輝いていますか？

尚紀の泳ぎは見事なものであり、犬の所までたどり着くの^に数分とかからなかった。

「・・・っておい！大型犬かよ！？」

犬にたどり着くと同時にそう叫んだ。

助けようとしていた犬は、尚紀の身長を越すか越さないかというほどの大きさだった。

「マジですか！？これ自分に助けろ言うのですか！？」

この犬を溺れさせた張本人の祐二は笑いながら手を振っている。先ほどまで真の爽やか笑顔に見えていたが、今はそう見えない。むしろ悪魔の笑顔だ。

「てんめえ！下手したら俺が溺れ死ぬじゃねえか！！」

「大丈夫だ！！死んでもコンテニューすればいい！！」

「できるか！！」

こんな馬鹿げた会話をしている合間にも犬は必死に足掻いている。とりあえず今は助けることに集中しよう。

尚紀は溺れている犬の背後に回りこみ抱きかかえる。
いわゆる人命救助の時に用いられる方法だ。

正面から助けようとしたら抱きつかれ、自分も動けなく溺れてしまう場合がある。

中学校の時、保険の授業で教えてもらったのである。

しかし図体がでかいうえに水をたらふく吸い込んだ毛皮のせいで犬は予想以上に重かった。

「うおおおおお！こうなりや根性だあああああ！」
犬を抱きかかえ、力任せに岸まで泳ぐ。

岸まであと少しと迫った時。

祐二の声が聞こえた。

「尚紀ー危ないぞー」

やる気のない声とともに、どこかを指をさしている。

指のさされた方向を見ると、そこには・・・

「わーい、大木が流れてくるうー・・・じゃねえええええー！！」

冗談にもならない光景だった。

折れた大木がかなりの速度で流れてきていた。

そしてその直撃コースにいる尚紀。

「じぶん死にますか！？このままバットエンド突入ですか！？どこかで選択肢間違ったか！？」

そんなことを行っている間に大木は尚紀の目前に迫っていた。

ガコンッ！！

鈍い音がした。

大木は見事に尚紀の頭にクリーンヒット。

尚紀は薄れゆく意識の中でこんなことを考えていた。

(そういえば、俺って服と一緒に下着も脱いだっけ・・・やつべえ、
今俺全裸じゃん(笑))

何か生暖かい感触で目を覚ます。

目を開けると、すぐに目の前にはあの大型犬の顔があった。

「何か顔が気持ち悪いんですけど・・・。」

顔を触ってみると、べっとりとし生暖かい汁まみれになっていた。
どうやら、この犬が俺の顔を舐めていたらしい。

とりあえず起き上がり辺りを見る。

川の岸边のようだ。

あのまま流されて結局岸まで流れ着いたようだ。

「結果オーライってやつ？」

その時風が吹いた。

「うわっ、さむ！」

寒いのも当たり前。

先ほどまで川で泳いでいたのだ。

しかも10月にである。

「おい、もしかしたら尚紀か？」

後ろから声が聞こえた。

急に声をかけられ、びっくりした尚紀は慌てて後ろを振り向いた。

「・・・真一か？」

目の前にいたのは、小学生からの悪友の真一だった。

課外授業（後書き）

新キャラ登場です。ここから物語は盛り上がる・・・といいな。

親友真一君

「うわぁ、お前の顔見たら萎えた。」

「親友に面を合わせてそのセリフはひどくね!？」

真一は滅茶苦茶ショックを受けた顔をしてそう叫んだ。

「まぁ冗談だ、気にするな。」

その時、真一は尚紀を見てこう言った。

「ところでなんでお前、モザイク一枚状態なんだ？」

「冗談だ、気にするな。」

「いや、冗談じゃ済まないよ!？その格好!!」

確かにそうだ、このままじゃポリスマンに捕まってしまう。

「ところでなんでモザイクなんてついてんだ？」

真一が素朴(?)な疑問を問いかけてくる。

「そりゃぁ、この小説は全年齢対象だからな、ついてないと色々つまずいだろう。」

「小説とかリアルの都合言うな!!それにこの小説多々危険な表現含まれているだろう!？」

エロ本とか、エロサイトとか!!」

「むっ、それは不味いな。じゃあエ()本。」

「今頃伏字にしても遅いし!それにその単語自体不味いだろお!」

「おお!こんなところまで流されていたのか!」

聞きたくない声を聞いた気がした。

間違えてあってくれと祈りながら尚紀は声の方向へと振り向いた。

・・・案の定、祐二だった。

ずっと走っていたのか、前髪が汗で張り付いている。

って、俺は一体何メートル流されたんだ!?

「おい、あの人誰だ?」

真一が問いかけてくる。

「ああ、祐（ ）。」

「そこに伏字はいらないよ!!」

真一は尚紀が一番信用している親友だ。

こいつにすべての事情を話しても変な噂は流れないだろう。

それに言うことすべて真に受ける奴だから、案外あっさりと理解してくれるかもしれない。

さて、どうしよう。

↓ 真一に事情を話す

言わない

「何か選択肢出たああああ!!」

「うわっ!びっくりしたあ。いきなり叫んだりしてどうしたんだ?」
驚き後ろへ後ずさる真一。

どうやら彼には選択肢が見えないようだ。

「見えるほうが異常か?」

というか、小説に選択肢はいくらなんでもないと思う。

「なあ、大丈夫か?こんな寒い日に全裸で居るから寒さで頭狂ったか?」

本気で心配する目で見つめてくる真一。

少し可哀想な子を見るような瞳にも見えてくる。

↓ 真一、君が好きだ!!

実は俺、お前のことが・・・(対象この場に居る全員)

祐二！俺は漢になる！！

「また選択肢出たあああ！！しかもどれもこれまでの会話と関連性がねええええ！！」

さっきの選択肢まだ選んでねえよ！！

「しかも何で真一に告白しなきゃいけないんだよ！二番目の選択肢とか最悪！！」

「やっぱお前病院行けよ。」

真一の目は完全に病人を見ている目だ。

「三番だ！！尚紀！！三番を選べ！！！！」

祐二が叫ぶ。

「なんでお前には見えるんだよ！！ちくしょおおおおお！！」

↓ 脱毛フラッシュ！！

発毛ボンバー！！

「もう俺を好きにしてくれ！！アーハッハッハッハ（泣）」

「もう駄目だ、お前。」

わーい、親友に駄目って言われたよ。

「へえ、尚紀の家庭教師しているんですか。」

壊れた尚紀のことをほっというて、真一は祐二に尚紀との関係などを聞いていた。

「そんな奴に敬語で話す必要は無いぞ。」

「おお尚紀、頭はもう大丈夫か？」

大丈夫とは断言できない気がする。祐二と出会った日から。

「それにしてもこんな人が家庭教師だなんてうらやましいよ。祐二さん面白い人だし。」

「クーリングオフする予定です。」

「家庭教師ってクーリングオフきくの!？」

「つかこいつ、漢にするための家庭教師って話、マジで信じてるわ。」

「ところで、祐二。」

祐二のほうを振り向き、尋ねる。

「俺が脱ぎ捨てた服はどうした。」

祐二は少し困った顔をして、すぐにいつもの歯を輝かせスマイルになった。

「置いてきた。」

「ワオー。」

なんとなくそんな気がしていた。

「いや、ワオーじゃないよ。お前そのままじゃ全裸のままだぞ。」

うむ、ごもっともだ真一君。

「ところで先ほどから放置しているあの犬はどうすんだ？」

完全に忘れていた。

どうやらあの犬は飼い犬みたいだ。

野良にしちゃ毛並みが整っていたし。

なにより救助活動中に気づいたが、首輪があった。

「とりあえず飼い主を探すしかないだろうな。」

親友真一君（後書き）

少し長めに書きました。たぶん。
いつも以上に体力を使ったのは確かです。

飼い主探し

犬の飼い主を探すことになりました。

「やっぱこの犬放置していこうぜ。飼い主探しなんてめんどくさい。」

「それでもお前主人公かよ!!」

真面目な親友、真一君に怒られちゃった。

飼い主探しを始めて出だしは上々だった。

まず犬の首輪に飼い主の手がかりと思わしき文字を確認できた。

灯渡家と彫ったあつた。
ひわたり

凄く珍しい名前だったので本当に名前なのかと疑問に思った尚紀たちは、

道行く人々に聞き込みをした。

しかし尚紀が全裸ということもあって、何度か通報されそうになり逃走すること32回。

依然として有力な情報も無いままだった。

「そういえばうちのクラスに灯渡って奴居たじゃん。そいつじゃね？」

不意に真一が言う。

「おめえそういうことはよ言わんか!ボキヤーー!!」

首を絞められ、真一はもがき苦しむ。

「い・・・いま思い出したんだよ・・・イヤマジで苦しい苦しい、グガゴゴォ・・・。」

真一の腕から力が抜けた。

助けを求め、伸ばしていた手が地に落ちる。

哀れ真一の魂は空へ飛び立っていったのでした。

「真一・・・お前のことは忘れないよ。俺に生きるということを教

えてくれてありがとう!!」

尚紀は真一の魂が召された空へ誓う。

もう彼は後悔することは無いだろう。

それは、大事なことを教えてくれた友と交わした、約束だからだ。

「ちよっと待てええええ!勝手に殺すなああああ!」

青ざめた顔のまま立ち上がる真一。

「死んでればいいものを・・・。」

「さらっと怖い事言うんじゃない!!」

なかなかでかい家だった。灯渡家は。

庭だけで俺んちの倍あるよ。

「尚紀んちはマンションだからね。」

「黙れエセ漢。一話につき一回は心を読むのヤメロ。」

しかしこんなでかい家を持つ金持ちがうちのクラスに居たとは。

灯渡・・・やはり思い出せん。

「なあ真一、灯渡ってどんな奴だったっけ?」

「あれ?知らないの?てつきり俺は知ってるものかと思っていただけだ。」

よく話していたし。」

よく話していた?

・・・やはり思い出せん。

「俺には・・・俺には封印された記憶でもあるというのかあああああ!」

なんかのSF映画みたいに。

「お前アニメの見過ぎだ。」

断言するか友よ。

「お前には封印された漢が眠っているんだ!!」

「封印された漢って何だあああ!!」

人様の家の前で騒ぐのはやめましょう。

「で、本当に覚えてないのかよ、尚紀。」

ほんとにさっぱり思い出せない。

「漢になれば思い出せるに違いない! さあ尚紀! 一緒に!」

祐二の顔面を力一杯殴りつける。

見事に吹っ飛ぶ祐二。

「灯渡美雪だよ。よく休み時間に話していたじゃないか。」

その言葉を聴いたとき、俺の中の記憶の封印が解かれた!

「ああ美雪か。なるほど。」

「いや、何でフルネームで言うかと思いついたよ。」

「女子の名前は名字まで覚えていないんだよ。」

「つか休み時間よく話していたって、そりゃ向こうから話しかけられていたんだよ。」

灯渡美雪。

高校で知り合った女子である。

向こうは俺と一度会ったことがあると言っているが、

俺にはそんな記憶など無い。

外見は、黒髪の腰を軽く越すほどの長髪。

どこか寂しげに見える瞳が印象的である。

性格は基本的にあまり喋らないほうで、

おとなしい感じである。

先ほど真一からよく話していると言われたが、

主に俺の話に相打ちをうっているだけ。

まあ周りからしたらそれだけでよく話しているほうらしい。

「美雪かあゝ。あんますすんで会いたかねえなゝ。」

「お前、彼女のこと苦手なのか？」

「いや、苦手でも嫌いでもないんだけどな。」

会話が続かなかった時の空気の重さは尋常じゃないんでな。」

ていうか、俺の会話ペースに向こうがついていけないことが多い。

「まあ犬を返しに來ただけだし、犬を返してさっさと退散したらいいんじゃないか？」

後ろから祐二が声をかけてきた。

「どうやら復活したっぽい。」

「それもそうだな。よし行くぞ！」

気合を込め、チャイムに手を伸ばす。

「あれ？・・・尚紀・・・君？」

後ろから聞いたことがある声が聞こえた。

チャイムを押そうとした手は見事に失速。

空中に留まった。

後ろを振り向くと、案の定美雪が居た。

「ハ、ハロー。美雪。」

とりあえず挨拶。

「あ・・・はい。こんにちは。」

深々と頭を下げる。

美雪は頭を上げると、顔を赤らませ

「と、ところで・・・その・・・なんで服も着ていないですか？」

と風にとけえそうな声で聞いてきた。

「あゝ、そのことはあまり触れないでくれる？」

「そうですか・・・はい・・・わかりました。」

「わかつちやうんだ!？」

真一が大声で叫ぶ。

「こら、あまり大声で叫ぶんじゃない。美雪も驚いているじゃないか。」

美雪は過去に何かあったらしく、大きな音や声を以上のほど怖がっている。

前に教室のガラスが割れた時、泣きながらパニックになってしまったことがある。

「ああ、はい、すみません。」

その事件を知っている真一は素直に謝る。

「いえ・・・こちらこそ・・・」

ところで・・・何かうちに御用でしょうか？」

あいかわらず、小さな声でしゃべる。

「そうだったな。お前んちに來た理由はこいつだ。」

俺はそう言い、犬を美雪のほうに押し出す。

飼い主探し（後書き）

中途半端なところで区切ってしまいました。
とりあえず一応ヒロインの美雪の登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737a/>

THE漢

2010年10月10日07時52分発行